



南葵音楽文庫ミニレクチャー

旅する音楽家

～アルベニス《スペイン風セレナータ》～

近藤秀樹

2019年10月26日(土) 11:00
南葵音楽文庫閲覧室(和歌山県立図書館内)



南葵音楽文庫
和歌山県立図書館内
和歌山市西高松 1-7-38
tel.073-436-9500

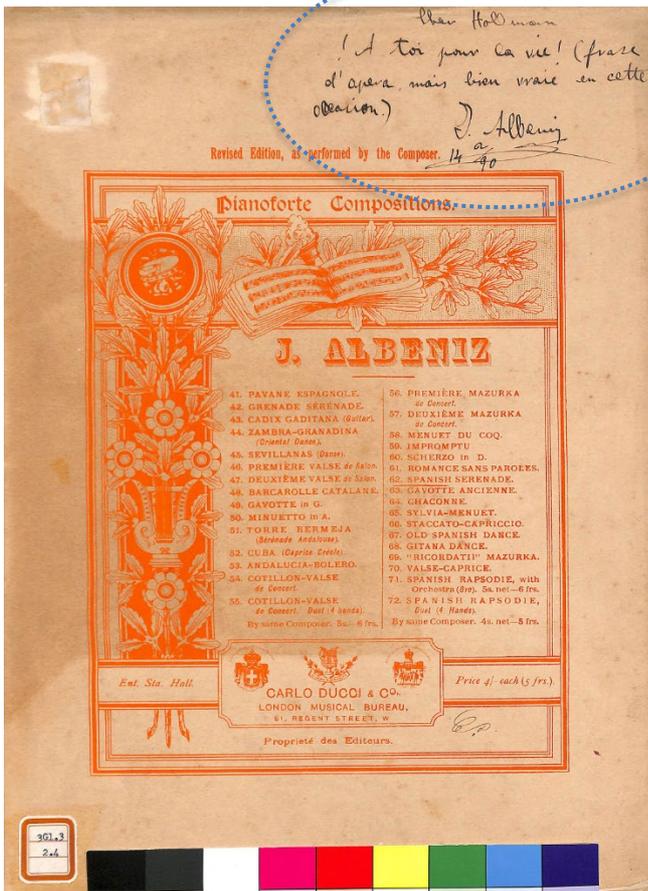
はじめに: アルベニスとホルマン

ホルマン文庫中のアルベニスの作品

- ピアノ曲《スペイン風セレナータ》の楽譜。
- 作曲者の献辞あり。日付は1890年2月14日。

イサーク・アルベニス (1901年)

https://en.wikipedia.org/wiki/Isaac_Albeniz#/media/File:Isaac_Albeniz,_1901.jpg



Cher Hollman
! A toi pour la vie ! (Frage*
d'Opera mais bien vraie en cette
occasion.) J. Albeniz
4/2/90

親愛なるホルマン！
命あるかぎり、君とともに！（まるで
オペラのセリフだけど、いまここでは
真実だ） J. アルベニス
90年2月14日

* 恐らく Phrase の誤り。

• これまでのアルベニスの評伝には、ホルマンのことは出てこない。

→ 二人はどこで会ったのか？

1. イサーク・アルベニス (Isaac Albeniz 1860-1909)

スペインの作曲家、ピアニスト。

- 1860年にカタルーニャのカンプロドンに生まれる。
- 1876年からブリュッセル王立音楽院で学ぶ。
- 1883年、スペイン国民楽派の先覚者フェリペ・ペドレルと出会う。
これがきっかけで、作曲に重点を置くように。同年、結婚。
- 1890年以降、ロンドンを拠点に演奏活動を行う。
- 1894年以降、パリに居を構え、フォーレ、ショーソン、デュカスらと交友。
- スコラ・カントルムでピアノ演奏を講じる。教え子にデオダ・ド・セヴラック。
- 1900年頃から腎臓病を患い、スコラ・カントルムの教授職を辞す。
- 1909年、フランスのピレネー山中のカンポ・レ・バンで亡くなる。

代表作: ピアノ曲集《イベリア》*Iberia* 全4巻 (12曲)

2. ロンドンのアルベニス

アルベニスが《スペイン風セレナータ》の楽譜をホルマンに贈ったのは、ロンドン時代。

アルベニス、ロンドンへ

- 1889年にロンドンで演奏会。大好評を博す。→ロンドンに家族ぐるみで移住。
- 多彩な活動
ソリストとしてのみならず、室内楽も演奏。
管弦楽曲のコンサートを企画。スペインの作曲家たちの作品を取り上げる。
喜歌劇《魔法のオパール》を作曲、上演。好評を博す。

二人のパトロン

ヘンリー・ローヴェンフェルド (Henry Lowenfeld, 1859-1931)

ポーランド出身のイギリスの起業家で、劇場支配人。

フランシス・バーデット・マニー = カウツ (Francis Burdett Money-Coutts, 1855-1923)

自作の台本で歌劇を書くことを条件に、アルベニスを経済的に援助。



アルベニスはマニー = カウツの台本で、歌劇《ペピータ・ヒメネス》《ヘンリー・クロフォード》《マーリン》を作曲したほか、《4つの歌》他の歌曲を書いた。

◀ マニー = カウツ (左) とアルベニス

<http://www.gaudiallgaudi.com/images/Museu%20Albeniz%20amb%20Money-Coutts.JPG>

アルベニスとチェリストたち

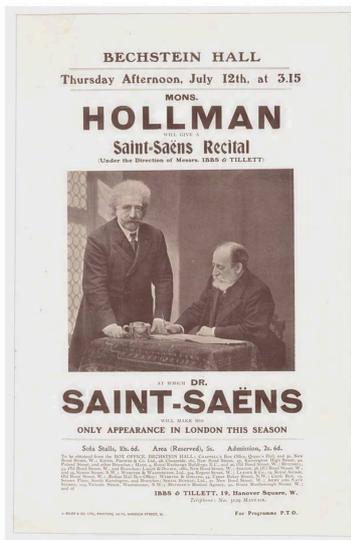
- 1890年初頭、アルベニスはチェリストを含む複数の音楽家たちとイギリスで演奏旅行。
- 1891年、アルベニスのピアノ伴奏で、チェリストのウィリアム・ヘンリー・スクワイヤ (William Henry Squire, 1871-1963) がデビュー。

スクワイヤは、のちにフランスの作曲家フォーレからチェロの名曲《シシリエンヌ》を献上されている。

https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/a/a7/William_henry_squire_cellist_01.jpg



- 1892年、チェリストのダーヴィット・ポッパー (David Popper, 1843~1913) と共演。



ロンドンのホルマン

ホルマンは、1885年にロンドン・デビューを飾ったあと、たびたびイギリスで演奏。

※ただし、ホルマンは1887年以降パリに居を構えていたため、アルベニスとの出会いはロンドンではなくパリであった可能性もある。(アルベニスは1889年にパリデビュー。)

ホルマンとサン=サーンスがロンドンで行ったコンサートのチラシ。

3. 《スペイン風セレナータ》と《カディス》

《スペイン風セレナータ》作品 181

- ロンドンの C. Ducci & Co., から 1890 年に出版。
- 同年、バルセロナの J.B. Pjol & co.からも、《有名なスペイン風セレナータ》(Célèbre Sérénade Espagnole) の題で出版されている。
- 〈カディス〉 Cadiz (《スペイン組曲》第 1 集第 4 曲) としても知られる。

⇒ 同じ曲が、異なる二つのタイトル(《スペイン風セレナータ》《カディス》)で出版されている。

《スペイン組曲》第1集

- 全8曲の組曲として構想され、広告もされたが、実際には4曲しか書かれなかった。
- 1901年に、スペインの楽譜出版社 Casa Dotesio が8曲セットで出版。
書かれなかった残り4曲……アルベニスの既存の他の曲で埋め合わせる。[● 下の表]

スペイン組曲 第1集 作品47

既存の作品

曲名[地名] (曲種)

- | | | | |
|------------|------------|---|-----------------------|
| 1. グラナダ | (セレナータ) | | |
| 2. カタルーニャ | (コランダ) | | |
| 3. セビーリャ | (セビリャーナ) | | |
| 4. カディス | (サエタ) | ← | スペイン風セレナータ |
| 5. アストゥリアス | (伝説曲) | ← | 前奏曲 (《スペインの歌》第1曲) |
| 6. アラゴン | (幻想曲) | ← | 2つの性格的小品 第1曲 |
| 7. カスティーリャ | (セギディーリャス) | ← | カスティーリャ (《スペインの歌》第5曲) |
| 8. キューバ | (カブリッチョ) | | |

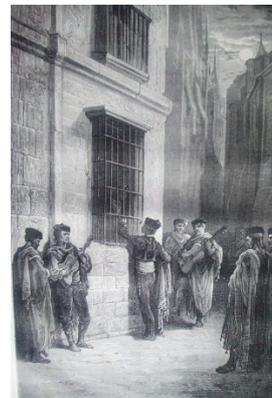


アルベニスの《スペイン組曲》作品47は、スペインの Edición Zozaya から出版される予定で、全8曲のタイトルも決まっておりましたが、そのうちの4曲は、全曲版に先行してばら売りされていたが、その全曲版が同社から刊行されることはなかった。1901年になって《スペイン組曲》が Casa Dotesio 社から刊行されたのは、Zozaya から Casa Dotesio にアルベニスのピアノ曲の著作権が移ったことがきっかけと見られている。その際、欠けている4曲をアルベニスの既存の別のピアノ曲で補うという措置が採られた。

- 《スペイン組曲》第1集が人気を博したため、《スペイン風セレナータ》は、今日ではむしろ《カディス (サエタ)》のタイトルでのほうが、よく知られている。しかし……。

セレナータとサエータ

《スペイン風セレナータ》：セレナータ（セレナード）らしい特徴
 ギター風の伴奏＋叙情的なメロディ：
 若い男が恋人のいる窓の下で歌う



ギュスターヴ・ドレ『コルドバの路上でのセレナータ』▶



▲ アルベニス《スペイン風セレナータ》第5-8小節



《カディス》の副題（曲種）：サエタ Saeta

サエタ：「矢」の意味。スペインの聖週間（セマナ・サ
 ンタ）において、宗教行列の神輿を讃えて、バルコニーか
 ら歌われる。

cf. アルベニス〈セビーリャの聖体祭〉

（《イベリア》第1巻第3曲）

カサド《チェロ・ソナタ》第3楽章〈サエタ〉

◀ フリオ・ロメロ・デ・トーレス『サエタ』

⇒ 《スペイン風セレナータ》で《カディス》（サエタ）を代用するのは、無理がある……？

《スペイン組曲》第1集の再編集に、アルベニス自身はタッチしていない？

していればこんなことにならないはず。

当時、アルベニスは歌劇《マーリン》の作曲に没頭。

ピアノ曲の旧作の再利用には関心がなかったのではないか。（Ullrich Schneider の説）

○ 主要参考文献

W.A.Clark: *Isaac Albéniz, Portrait of Romantic*, Oxford university press, 1999.

Albéniz: *Suite Espagnole*, Opus 47, Edited by Ullrich Schneider, C. Henle Verlag, 2005.